

興味津々高根の散策

2007.7.22



栗林「鈴木家」長屋門



高根概要

安永風土記によると、中野村端郷折居に属しています。

※中野村（全）—折居・要害の欄に記述

端郷折居 高根・八反町（栗林）・堂田・南下田・迎野・砂川など

- 神社—高根権現社（高根）・熊野社（堂田）
- 仏閣—阿弥陀堂（栗林）
- 修験—五宝院（高根）
- 御蔵場—御田御蔵（3ツ）御門（1ツ）—栗林（八反町）
- 屋敷名—栗林4軒 堂田4軒 八反町5軒 高根4軒 狐塚2軒 手母毛3軒
窪1軒 前村2軒など
- 古塚—狐塚（高根・宮の坊・下田）

地名と屋敷名

- 栗林—ももとは屋号である。まわりに分家を出して小集落をつくりました。
- 高根—高根権現社の名。4人の地主が分家を出し、田中、前村の地名。
- 八反町—地名の由来は不明。御蔵場があった。そばに松の木沢川が流れています。
- 堂田—高根神社の社領田のあったところ。近くに鳥淵という地名。
- 南下田—もとは下田と言いました。住還道の名前、狐塚、宮の坊の地名。
- 迎野—高根神社の東の原野についての地名。北に長泥、窪、東に手母毛、茶畑。中屋敷の地名。
- 砂川—昔、宮沢川がたびたび氾濫し、土砂が流れこみ砂上げをしたところです。

地区の歴史

- この地区は松の木沢川、宮沢川、大深沢川の下流域にあたり、その影響を受け、原野などの湿地などで開発が遅れたところです。（微高地に集落）
 - 高根権現社の創建（平泉藤原時代）→江戸期寛政九年一揆の中心地（正覚坊）
 - 栗林鈴木家は、権内茂仁が元禄5年（1692）白山上麻生の鈴木家から分家し、2代、3代…と開拓を続けながら耕地を広げ、多くの分家を出しました。
 - 栗林初代鈴木権内茂仁は、安永6年（1777）孫の源兵衛（折居鈴木家初代）を連れて隠居分家をして、折居繁栄のもとをつくりました。
- ※各地に残されている鈴木家関連の地名 東・西五郎兵衛（現在の上中野行政区）、隠居坂（現在の折居町行政区）

川尻概要

安永風土記（安永六年）

端郷折居（落合、川尻、土手、ニツ淵、ニツ淵前、谷地館、千刈野）

- 落合—大深沢川と堤尻川の合流地。川が落ち合うところ。
- 川尻—大深沢川の下流で川尻の地名。昔から大深沢川が洪水を起すと大量の土砂が流れこみ、地力のある土地でありました。
- 土手—大深沢川の洪水を防ぐための堤防即ち土手。
- ニツ淵—昔、この地帯は低地で排水路がなく雨が降ると水がたまり、二か所が大きな沼になっていたのでできた名。
- ニツ淵前—ニツ淵の南側の地で水田地帯。
- 谷地館—平泉藤原時代真城を北の守りとして築かれた館の1つ。
北の大門、真城寺（真証寺）
- 千刈野—土手の下流にありました。昔、広い原野で「カヤとヨシ」等が生い繁り、屋根やカベに用いました。千把刈ったからか？

※川尻地区は中野村の中心に位置していますが、大深沢川の影響を強く受け、堤防の整備に力を注がねばなりませんでした。

※この地区は、沼や原野、湿地などがあり、少しずつ開発が進んだ場所でありました。

屋敷名 川尻屋敷5軒 西中野屋敷5軒など

五代以上の百姓 5代千刈野屋敷組頭久治

高根分教場



高根分館は、昭和31年(1961)真城公民館の高根分館として改築され開館しました。(現在は高根会館) 過去は、小学校として子弟の教育の場でありました。明治5年(1872)の学制の公布から度々の変更がありましたが、小学校は、住民人口600人を基準に各区に定められ、神社やお寺をかりる形で開校されました。

明治37年(1904)、真城地区には中野、秋成、瀬台野、真城(折居)の小学校が設けられました。大正2年(1913)に、真城小学校が現在地に統合され、今までの学校は分校として残りました。そのため中野分校がこの地に移され、高根分教場として新築開校されました。

今ではその名残として、桜の古木が残り、「桜の木の下」という記念の碑が建てられています。

高根神社

高根神社は、平泉藤原氏のころに、一族の民部基成が住民の難儀を救おうとして、富士山の高根権現社をこの地に勧請したものの説があり、高根の地名の由来とされます。

これらの人々の信仰を支えて、山形県羽黒山五宝院の修験者が別当になっていました。



「寛政一揆」で追われた高根神社の御神体が、平成24年(2012)9月3日(月)215年ぶりに里帰りしました。

寛政一揆の指導者「正覚坊」の父親らとともにその御神体も宮城県古川に追われ、以後その地で大切に祭られてきた木像の木花咲耶姫命。

合祀祭は、日没後、地元住民が静かに見守る中厳かに行われ、翌週の14日(金)の高根神社例大祭で、初めて御神体のお披露目がされました。

彫刻

拝殿の「唐獅子」本殿の「竜」



覆い堂の中に、見事な組や細工の施された本殿があります。

古城字北高大寺（旧関村）に所在する「竈神社」は、明治19年（1886）に、当地方随一の宮大工であった飯坂弥五郎（79歳）が造った神社で、拝殿、幣殿、本殿の彫刻の美事さは、旧前沢町の指定文化財となっていたことで証明されております。

この高根神社も、昭和9年（1934）に弥五郎の流れをくむ宮大工（*及川吉治）によって造られました。（*弥五郎の弟の外孫で及川家に入籍）

また、「唐獅子」「竜」の彫刻は、弥五郎の作品の生き写しかと見間違ふほど、その正統を受け継いでいると言われています。

本殿の造りも「竈神社」を一回り小さくしただけで極めて似ており、神社建築上でも弥五郎の手法を取り入れているといえます。

「前沢町史 下巻二より」

正覚坊



昭和14年に
再建された石碑



昭和8年に
火災で割れた石碑

正覚坊が別当であった天明年間（1781～1788）は、凶作が続き、住民の生活は苦しく、合わせて役人の不正などもあり、生活の悲惨さは言葉にできない程逼迫していました。住民は、役人に年貢の免除などを願い出しましたが受け入れられず、それまでの不満が爆発する形で各地に一揆が発生しました。

中野、折居、小山の地方では、五宝院の別当の正覚坊にすがり救済を願って話し合いを重ねましたが、妙案が浮かばず仙台へ直訴することになり、これが百姓一揆となりました。

この結果、人望が厚く優れた人物であった正覚坊でしたが、一揆の指導者として仙台で処刑されました。

一揆が終わり、住民の要求が認められたこともあって、後年住民は、正義を貫いて処刑された正覚坊の魂を弔い、その碑を建立しました。残念ながら高根神社とその石碑は、昭和8年付近一帯の火災で焼失損壊しましたが、昭和14年に住

民有志によって再建され、社殿は往古の姿を残しています。

また、奥州市文化会館開館20周年記念公演として、平成24年（2012）3月3・4日に奥州市民劇「ひびけ木貝よ！」寛政の義民 清三郎と正覚坊の青春（原作：秋成行政区の宍戸春雄さん）と題して、百姓一揆にまつわる高根神社や正覚坊の話が奥州市文化会館（Zホール）で公演されました。エキストラには、高根老人クラブのみなさんを始めとして、真城地区のみなさんもたくさん参加して盛り上げました。

栗林屋敷 鈴木家



栗林鈴木家は、安政5年（1858）の完成と伝えられ、現在水沢のふるさと名所50景に指定されています

鈴木家の先祖は紀州和歌山県藤代の出身で、鈴木三郎重家が義経に仕え、白山上麻生に下向しました。

鈴木家の初代、鈴木権内茂仁がここに（旧中野村 折居）屋敷をかまえ分家したのは、江戸時代徳川家5代将軍綱吉の元禄5年（1692）で、以来現在の当主まで11代目を数えています。

長屋門をくぐって屋敷に入りますが、長屋門を構えることができた鈴木家は、肝入などの村のまとめ役をしていたということが分かります。

栗林屋敷 長屋門

長屋門とは、江戸時代、屋敷表門の一形式で、左右に長い棟を持つ屋根作りの門をいいます。

本来は武士の家の門であり、格式によって、一見すれば禄高や身分が分かりました。

地方において、名主、庄屋級、名字帯刀御免の家格を有する家では、冠木門ではなく、長屋門形式をとるものが多くありました。



栗林屋敷 経塚跡

経塚は、仏教の経典を埋めて盛り土をしたものです。造るようになったのは、平安時代中頃に、慈覚大師が唐から伝えたことが始まりのようで、正法寺の須弥壇の下や、平泉の金鶏山にもあります。鎌倉、室町時代には、極楽浄土・現世利益の祈願・供養として造られました。

鈴木家では、先祖代々神仏への信仰が厚く、初代から四代にわたって、法華経一石一字供養塔がニカ所に奉納してきました。一基は折居町西側山上に、二基目がここの地にあるもので、江戸時代のもので、



木造阿弥陀如来立像 (昭和60年岩手県指定有形文化財)

木造阿弥陀如来立像は、鎌倉時代の宝治2年(1248)、仏師千阿弥陀仏が造った仏像です。材質は桂で、一本割刳(わりはぎ)造り、漆箔、玉眼が入れられ、肩から流れるように大布をまとい来迎印を結んで立っている仏像で、玉眼の使用や比較的バランスのとれたプロポーションなどが当時の流行に沿っており、この地方の中世(鎌倉・室町時代)の文化を知る上で重要な仏像です。

どうしてこの仏像が鈴木家に安置されるようになったのかは分かっていませんが、元禄5年(1692)、先祖の権内茂仁がお堂を再興し、明治時代になって七代一郎茂育(初代真城村長)の時、新たに彫刻で飾ったお堂を再建しました。昭和60年(1985)に文化財の指定になった時、現在の当主である鈴木茂壽さんが、防災に備えて頑丈な鉄筋コンクリートを土台とした覆堂を造り、今も大切に奉られています。



栗林屋敷 屋敷林

栗林屋敷は、今は少なくなった屋敷林（エグネ）と土塁で囲われています。エグネは強風から屋敷を守り、植えられている木は家造りの時の建築材料となり、また煮炊きの燃料や暖房の原料として生活を支えました。他に敷地内に植えられている樹には、実の成る栗や柿などの樹もあり食料にもなりました。

それらの樹を燃料として保管する方法は、屋敷の廻りに切った木を積み重ねた「キズマ」と言われ、当時のこの辺りでは一般的のものでした。



菊地家「御蔵」

鈴木家の南東に菊地家があります。

二棟の倉、ひとつの門を構えている菊地家は、昔から屋号を「御蔵」と称してきていることからみて、税として納めた年貢米を収納する「御蔵場－御田糶御蔵－」を持つ重要な役割を果たしていた家と思われます。

安永風土記によると、御田糶御蔵

- 御蔵1つ、長さ15間、横2間半
- 御蔵2つ、長さ10間、横2間半
- 御門1つ

御蔵場の南方を松の木沢川が流れています。この蔵に収められた年貢米は、川船で北上川の河港に運んだと思われます。

なお、この川の上流に「舟戸」という地名があります。

JA岩手ふるさと 水沢カントリーエレベーター



《むかしの稲作作業》

各世代が一つ屋根の下で生活していた時代の農業は、農繁期には牛馬を仲間に、学校も休みとなり家族全員が作業に力を合わせました。

特に、田植えは部落の共同作業で「結い・・・よいっこ」と言われました。時代とともに日本の産業が拡大する中、兼業農家が増え、また人口の減少によって農家は慢性的な人手不足となりました。それにより農業の機械化が進み、さらには大きな設備投資で生産コストの多大化や自由化政策などが追い打ちをかけ、残念ながら、この辺りでも米の生産にあまり魅力がなくなっているのが現状です。

《水沢水稲・育稲センターの建設》

農業を取り巻く環境の変化は、舗場の大規模化と作業の機械化、一方では就業人口の減少と一段と高齢化が進む中、過剰投資の解消と精算コストの低迷に対応する必要から、協同・集約による水稲育苗から精製出荷までのライン機能を備えるセンターが、平成11年(1999)3月、真城字谷地館に建設されました。

《水沢カントリーエレベーター》

育苗ハウスは28棟あり、田んぼ660ヘクタール分の苗が生産できる規模となっています。

カントリーは、刈り取りされた「もみ」が各生産者の田んぼから直接搬入され、受け入れ能力は1日200tから400tまで可能な大規模な施設です。

受け入れたもみは、風力タービンにより自然乾燥と同じ条件をつくり、含有水分15%にするため、1ヶ月半の期間をかけ、特Aの水沢米として出荷されます。

《水田の役割》

水田は、地球環境が話題となる現在に、米の生産だけではない観点で見直されてきています。

平成12年(2000)3月、農水省・岩手統計事務所が胆江地区の田畑の働きを分析した「わがまちの自然農業おもしろ発見」を発表しました。

水田の役割は、食料生産はもとより

- ☆ 田んぼは自然のエアコン
温暖化解消の冷却装置
- ☆ わがまちの身近なダム
梅雨時期の大量に降る雨の保水
- ☆ 大気の浄化に大きな力

胆江地区の水田の貯水力は、東京ドーム32杯分で、胆沢ダムの2倍以上と試算されており、その点で年間4千万円の省エネの効果があると計算されています。

また、田園の景色は、空気の清浄化も果たし、温暖化に対しては冷却装置となり、人の目には景観として心と和ませる働きをしています。

胆江日日新聞 2007年（平成19年）7月23日



地元の魅力を再発見した
真城ふるさと探訪教室

地域の魅力を再認識

住民が名所・旧跡巡る

水沢区真城

水沢区真城地域を散策する「真城ふるさと探訪教室」が22日、同区真城

地元の魅力に対する認識をあらためて深めた。地域の文化、歴史、名所を継承することなどを目的に毎年開催。今回は「興味津々高根の散策」と銘打ち▽高根の地名の由来とされる高根神社▽百姓一揆の指導者として仙台で処刑された正覚坊▽県指定有形文化財の木造阿彌陀如来立像▽JA岩手ふるさと水沢カンントリーエレベーター——などを見学した。

教室の指導者は、地域住民の中でもさまざまな分野に詳しい7人のボランティア。打ち合わせや事前散策などの準備を5月から進めながら、資料をまとめたという。

指導者たちは、文献などを参考に歴史や伝説などを紹介。高根神社では正覚坊について「彼の一揆は苦しい住民の要求を訴えるために始まり、絶対に役人を殺さなかった。人望も厚く、彼のような先人が真城にはいたこと覚えていてほしい」と話した。参加者たちは時折うなずきながら、真剣に耳を傾けていた。



お屋敷の庭で、当主の鈴木茂壽さんと記念写真をパチリ！

